

正課外活動団体加入学生の学修に関する考察

A Study on Academics and Students' Extracurricular Activities Outside of the Regular Curriculum

吉川 博行

大手前大学 教務課

大学教育において学生の成長を促すための様々な取り組みがある中、筆者はこれまで課外活動加入の有無に着目し、これと GPA (Grade Point Average) との関連に基づいて学修についての考察を行ってきた (吉川 2014)。本稿ではこれまでの研究を踏まえ、大手前大学に所属する学生の公認課外活動団体加入の有無を背景に、前年度との比較検証を行うとともに、入試種別による学修状況も報告する。

キーワード : GPA、学修支援、クラブ活動、学生の質、入試別の学修状況

1.はじめに

GPAの活用方法について、学生の学修状況を把握しやすくなり学生の学習意欲低下を早期に発見し、的確な学生指導に結び付けられやすくなるという事や、大学生の質保証を担保する数値として活用する等さまざまな活用方法が挙げられる。本稿では、GPAについての本学での活用を紹介し、本学所属学生の公認課外活動団体 (以下、クラブ活動) 加入学生の学修状況を考察し、さらに近年入試の多様化による学生の質についての議論もなされている状況を踏まえ、GPAからどのような学生の状況がうかがえるかを考察する。

2. GPA 活用について

大学評価・学位授与機構によると、GPA (Grade Point Average) 制度とは、「授業科目ごとの成績評価に対して、GP (グレードポイント) を付し (例えば、5段階 (A、B、C、D、E) の成績評価に対して、それぞれ 4、3、2、1、0 の GP)、この単位当たりの平均を出し、その一定水準を卒業などの要件とする制度」(大学評価・学位授与機構 2016) としている。成績評価を平均値として算出する事で、学修の成果を可視化しやすくするものである。本章では、その活用事例について述べる。

2.1 本学における GPA を用いた成績評価について

大手前大学 (以下、「本学」とする) における GPA

の算出方法について、「A」「B」「C」「D」「F」の5段階にて評価され、「A」～「D」の成績を得たものについて単位を付与する。GPA について、これら成績評価に対して「A」=4、「B」=3、「C」=2、「D」=1、「F」=0 としてポイントを付与される。履修した授業科目単位数に Grade Point を常時、その総合系を履修登録単位数の総合系で除して算出している¹⁾。

これにより、成績評価を数値化しいわゆる成績評価の厳格化、大学生の質保証について担保している。その他、活用方法については拙稿で紹介しているのでここでは割愛する。

2.2 一般的な活用事例について

半田 (2011) は GPA の活用について、アメリカでの GPA 活用例として大学生の自動車保険料の割引制度があることや、ファンクショナル GPA など様々な事例紹介をしている。その中で、GPA は学生の学修状況を図る指標として使用されるだけでなく、成績評価に対する説明責任を果たし得るものとなり、また社会に対する大学教育の質保証の基本ともなると紹介している。

さらに、GPA の活用として、「全員優秀で授業の目標を達成したことは幸せなことではなく、差異化しうるに十分な評価を怠っている授業との出会いを意味する。」と厳しく指摘し、教員同士の「絶対的相対評価」がなされ、学生の評価基準となるだけではない、と述

べている。

拙稿でも述べたが、半田の指摘の通り、制度だけが独り歩きしてよいものではなく、あくまでも未然に学修不振者を早期に把握する事で、学生の学修意欲を盛り返す指標として扱うという認識で活用していくと効果的であると考えられ、そのために学生のアドバイザーとなりうる様々な立場の者（教員、職員、保護者、友人等）が制度を理解しうまく活用する事で効力を発揮する。また、学生に対する成績評価が教員相互でも可視化される事で、教員の学生に対しての評価について相対的な比較も可能とし、厳格な成績評価がなされるきっかけにもなり、学生への成績評価に対する説明責任が果たし得る。

3.社会と学生が求める大学像

本章では、卒業後大学での学びについて、社会的にどのような人材を求めているのか、また、高校生が大学に求めているものは何かを探る。

3.1 社会が求める人材像

厚生労働省によると、企業が学生に求めている要素として、「仕事に対する熱意・意欲、向上心」「積極性、行動力」「チームワークを尊重できる」「コミュニケーション能力」などを挙げている。一方、「語学力」「学業成績」「最終学歴」の割合は低いと分析している（厚生労働省2013）。

中央教育審議会は、大学における学びとして「学士力」を養うよう位置づけており、学士力とは大きく「知識・理解」「汎用的技術」「態度・志向性」「統合的な学習経験と創造的思考力」といった要素を保つことを示している（中央教育審議会2010）。

3.2 学生が求める大学像

学生は大学に何を求めているのか。これについて山田は、70年代と2000年代の学生気質を比較した考察を行っている。山田によると、大学入学の比率が高まり、大学がレジャーランド化していく中、「楽しみ」を優先していたが、現在の学生は、大学のユニバーサル化により、何よりも卒業後の就職に重きを置き、資格取得のために勉強するなど、大学に求めているニーズが変化し、大学もそのニーズにこたえる形で資格取得を目的とするなど、「エリート的人格形成ではなく、大衆が産業社会に適応するための知識を与える場として変化している。」とし、企業側の求める学生像との乖離がなされ、資格取得に専念する事が勉強熱心であると勘違いしているのではないかと指摘している（山田

2007a）。

また山田は、国公立大学学生を対象にしたアンケート調査を基に、最近の学生は勉強熱心になったと言われ、まじめ化が進んでいるが、大学の授業に期待するものとして、「現在の学生は授業において職業や就職活動に結びつく専門的知識を重視しており、教養的な知識や自身の私生活の充実にあまり期待していない。」とし、教養よりも就職に役立つための知識を得たいと考えているのではないかと指摘している（山田2007b）。

その認識に大学側も気づかなければ、山田が指摘するように、ユニバーサル化に伴った大学運営を行う中、入学生のニーズをそのまま受け入れ続けてしまうと、大学独自の教育がなされないままとなり、時代に沿った運営を行っているとは錯覚してしまう事にもなりかねない。

4.正課外活動における学生の成長

4.1 学修状況を考察した意図

文部科学省は大学設置基準第21条の中で、学修の定義を大学の正課授業内において行われるものとし、その成果を評価して単位を授与すると示している。大学設置基準で示されているように大学にとって学生の成長とは、正課教育の充実によってなされるものであるという認識が強くある。しかし、大学での学修とは、正課教育での成果だけでなく、課外での活動も成長に寄与するのではないかと。溝上も授業・授業外の学習をバランスよくおこなう学生が自らの成長を実感しているとし、正課外教育の重要性についても指摘している（溝上2009）。学生の気質は変化し、まじめに大学での学びを追究しているように見えるが、3.2でも述べたように、就職のために学ぶ学生も多くなっているようである。そのような中、多様な価値観を持つ人との交流や思いもよらなかった気づきから得られる成長を現在の学生はどこで得ていくのであろうか。

近年の教育手法と言われる代表的なものにPBL学習、アクティブラーニングなど、が挙げられるが、筆者としては、以前は地域とのコミュニティにおいて当然のように行われていたのではないかと考える。しかし、お互いが関わりあう中で涵養されていくはずの機会や場所が少なくなり、主体的に学ぶという機会が少なくなった結果として叫ばれている手法だと感じている。

人間は、様々な人との関わりがある中で成長する。正課外での学生の活動が学修にも寄与すると考え、そ

の中でも特に同じ目標に向かって努力するクラブ活動加入学生に主眼を置き、彼らの学修の成果について様々な面から研究を行う。

4.2 クラブ活動加入学生の成長について

溝上は、授業外学習に着目し、授業内とクラブやアルバイトなども含めた授業外で身につけた知識や技能について学生に調査したところ、授業外での成長も認められ、正課教育の精度を高めるのは当然だが、正課外での成長も得られるものであると指摘している（溝上2015）。

筆者は大学により公認されているクラブ活動について、自治組織化されている団体も多いと思うが、自治は自治として守りつつ、強制的なものではなく、教育効果が図られるという観点で大学側（教職員）が積極的に学生に関わって行く事も大切ではないかと考える。

4.3 課題未解決型学習

クラブ活動に加入している学生は、たとえば体育会系ならば試合に勝つ、文化系ならば作品展示のコンペ入賞を狙うなど、クラブとしての何かしらの目標を掲げて、団体としてチームワークを高めて目標に到達しようとする。その過程において、様々な努力が必要とされるのはもちろんであるが、家庭環境、経済状況、そもそもの個人能力の違いなど、様々な価値観の相違がある。その違いに対し、チームとしてのコンセンサスを取り、いかに目標に到達するための創意工夫をなしていくか、という事に一人一人の部員が向き合っている。部員である学生は、自分が所属する団体での活動がただ「楽しいから」活動しているだけではない。時には運営や活動において、経済的、精神的に困難な局面もあり、個人個人が逃げだす事は簡単であるが、部の存続のため、部の価値を上げるためにお互い励まし合い、日々試行錯誤している。筆者はラクロス部を指導している中で強く実感する。

しかし、目標に向かってまい進するが、結果が出ない事が大半だろう。「勝つ」ための課題解決を求めるが、たとえば体育会系は極論すれば優勝者は1人（チーム）であり、ほとんどが最後まで勝ち抜く、という結果を得られない。言うならば、未解決に限りなく近い結果が予想されるにもかかわらず、結果ではなくプロセスを試行錯誤して結果に少しでも近づくべく取り組んでいる。本研究では、結果が出ないかもしれない事に取り組む姿勢を「課題未解決型学習」と呼ぶ。

この「課題未解決型学習」にひたむきに取り組む行為は、学生の成長という言葉で片づけるのではなく、

試行錯誤する事に対する持続力や忍耐力が養われ、学修にも結び付いているのではないかと考える。仕事でも、何事も期待する結果が出るとは限らない。しかし、成果を上げるために工夫し、その成果に近づくための精度を上げるべく我々も日々職務に就いている。このようなクラブ活動加入学生の「課題未解決型学習」活動が、学業に対しても根気よく取り組み、学修においても良い影響を与えていると考える理由である。

学生のクラブ活動に対して、「自治組織での行為」「余暇の延長戦」「楽しみたいだけ」という認識を持つべきではない。

5. クラブ活動加入者の学修状況の検証

クラブ活動加入による学生の活動が果たして学修にも寄与しているのか。本章ではその検証のため、クラブ活動加入の有無と修得単位数、GPAとの関係について、複数のデータを用いて考察する。

5.1 各学年の学修状況について

2014年度と2015年度のクラブ活動加入者、未加入者を比較し、クラブ活動が学修にどのように影響しているだろうか。

クラブ団体加入の有無による修得単位数とGPAの比較
表1-1 2014年度2年次生（編入生除く）

	平均単位数	平均GPA
全体 (N=545)	33.253	2.244
未加入者 (N=387)	32.455	2.187
加入者 (N=158)	35.209	2.383
文化系団体 (N=104)	35.240	2.423
体育系団体 (N=54)	35.148	2.305

表1-2 2015年度2年次生（編入生除く）

	平均単位数	平均GPA
全体 (N=467)	34.497	2.369
未加入者 (N=366)	33.940	2.333
加入者 (N=101)	36.515	2.500
文化系団体 (N=55)	38.473	2.663
体育系団体 (N=46)	34.174	2.305

表2-1 2014年度3年次生 (2014年度編入学者等除く)

	平均単位数	平均GPA
全体 (N=586)	68.614	2.395
未加入者 (N=445)	67.153	2.350
加入者 (N=141)	73.227	2.536
文化系団体 (N=99)	73.313	2.587
体育系団体 (N=42)	73.024	2.415

表2-2 2015年度3年次生 (2015年度編入学者等除く)

	平均単位数	平均GPA
全体 (N=506)	70.235	2.375
未加入者 (N=404)	69.243	2.327
加入者 (N=102)	74.167	2.521
文化系団体 (N=68)	75.059	2.617
体育系団体 (N=34)	72.382	2.327

表3-1 2014年度4年次生 (留年生・未履修者除く)

	平均単位数	平均GPA
全体 (N=652)	104.974	2.522
未加入者 (N=576)	104.283	2.502
加入者 (N=76)	110.224	2.678
文化系団体 (N=57)	109.597	2.663
体育系団体 (N=19)	112.105	2.724

表3-2 2015年度4年次生 (留年生・未履修者除く)

	平均単位数	平均GPA
全体 (N=559)	104.190	2.499
未加入者 (N=462)	102.959	2.467
加入者 (N=97)	110.052	2.655
文化系団体 (N=52)	111.096	2.785
体育系団体 (N=45)	108.844	2.504

※各表ともに小数第4位を繰り上げ

※2014年度：2014年6月6日、2015年度：2015年5月29日抽出

※加入者は本学公認クラブ活動加入者を指す

5.2 加入者と未加入者との比較

本学では、2014年度入学生よりカリキュラムが変更されたため、特に3年次生においては単純な比較が行えない面もあるかもしれないが、各表を見ると加入者が学修にも何ら関係していると言えるのではないだろうか。

なお、表1-1から表3-2で学生総数が減少しているが、入学者数の減少によるものである。各表の数値を見ると、加入者の単位数、GPAはともに平均値を上回って

いる事がわかる。ただし、体育会系団体加入者の成績を見ると、GPAは未加入者と比べ若干下回っている。

表2-1および表2-2について、2014年度、2015年度によってカリキュラムが異なるため単純に比較する事は適切でないかもしれないが、やはり加入者平均は未加入者よりも上回っている。また、表2-2は表1-2をGPAを視点に比較すると、学生の成長度も考察できると言え、全体的に上昇している事がわかる。

表3-1および表3-2について、やはり加入者の平均値が未加入者を大幅に上回っている事がわかる。

5.3 クラブ団体での活動における学修との相関

溝上は近年の学生の「学習」について、よく勉強するようになったと言われるが、授業には確かに出席するという学生も多くみられる。しかし、あくまでも授業内での学習であり、自習などを含めた授業外学習時間は少ない。よく遊び、よく学ぶ学生が高い成長を示していると指摘している (溝上2009)。

引き続き経年調査を行っていくが、本調査からも「よく遊び」という事ではないが、正課外での学生の成長という面で、溝上が指摘している事を示唆しているともいえる。

溝上はまた、学生の社会人基礎力が足りない、必要だと言って、対処療法的にプログラムを実施するのではなく、正課教育と連携する形でキャリア教育を考え直すべきであるとも指摘し、正課教育との連携を述べている (溝上2015) が、クラブ活動に加入する学生への支援ももっと大学として行う必要がある。表1-1から表3-2でも表れているように、クラブ活動に加入する学生が学修にも大いに関係しているといえる。活動に励む学生に対して、自治組織、学生の活動という認識ではなく、横断的に支援する事で、学生のみならず大学全体の成長につながるであろう。

5.4 クラブ加入者の入試種別による学修状況の考察

入学後の学修に関して、受験勉強では図る事の出来ない学生の発想力など、汎用性ある人材を受け入れるべく AO 入試など様々な入試制度がある。しかし、残念ながらその AO 入試などで入学した学生が、学修不振に陥った、また社会人として長続きしないというような意見を新聞紙上などでよく見かける。

ここでは、クラブ活動加入者を中心に、入試種別による入学者について、GPA を利用し、2014年度と2015年度における比較を行う。なお、データにおける条件は、5.1 で使用しているものと同様である。本考察については、学修においての到達点のみを確認するものと

して、修得単位についてではなく、GPAのみを使用する。これにより、比較的学年に捉われず、より多くの大学での学びに関するデータが考察可能となり得ると考えたためである。

なお、一般的な入試選考を経た入学者に対して考察を行う事を目的とし、編入学試験、留学生特別入試、社会人入試合格者については除いた。

表 4 入試種別ごとの比較 (2014 年度)

入試種別	学生数	平均 GPA
計 (N=1,706)		2.388
①AO 入試	全体 (N=326)	2.131
	加入 (N=62)	2.253
	未加入 (N=264)	2.103
② センター試 験、一般入試	全体 (N=488)	2.443
	加入 (N=106)	2.585
	未加入 (N=382)	2.404
③公募制 推薦入試	全体 (N=365)	2.438
	加入 (N=81)	2.473
	未加入 (N=284)	2.428
④指定校 推薦入試	全体 (N=527)	2.460
	加入 (N=120)	2.546
	未加入 (N=407)	2.435

表 5 入試種別ごとの比較 (2015 年度)

入試種別	学生数	平均 GPA
計 (N=1,484)		2.423
①AO 入試	全体 (N=310)	2.126
	加入 (N=80)	2.231
	未加入 (N=230)	2.061
② センター試 験、一般入試	全体 (N=424)	2.546
	加入 (N=74)	2.683
	未加入 (N=350)	2.517
③公募制 推薦入試	全体 (N=269)	2.522
	加入 (N=55)	2.586
	未加入 (N=214)	2.505
④指定校 推薦入試	全体 (N=481)	2.450
	加入 (N=85)	2.618
	未加入 (N=396)	2.414

入試種別を 4 項目に分けた理由として、大きく試験内容を分類したものである。試験内容として、①面接と課題作文、②筆記試験、③筆記試験と高校の評定平

均値、④面接のみ、となっている。

表 4、表 5 とともに、①について見ると GPA は全体平均値よりも低い値が出た。逆に、それ以外の入試種別で見ると大きな差はないように見える。クラブ活動加入者は、全ての入試種別ごとの入学者平均値を上回っている事がわかる。なお、①と②・③・④を比較した時、GPA に大きな違いがあるように見える。特に①と④を試験内容で比較すると、①の方が作文を課しているので入試条件が高いのではないかと思われるかもしれないが、④は高校内での選抜がなされた上での受験であり、①は高校内での選抜条件はなく、評定平均値などの出願条件さえ揃えば受験が可能である。

6.おわりに

筆者は教務課職員として学生と接し、またラクロス部指導者として他大学を含めた様々な価値観を持つ学生と関わる中で、現在の大学生の入学後の学修について、入学試験においていわゆる偏差値によって判断する風潮がある中、そのみで大学での学びの力を判断する事はできないと感じている。

特に私立大学で言えば、ブランド力ある大学に優秀な学生が集まりやすいのは確かかもしれないが、多様化している入試制度や大学付属の中高一貫校からエスカレーター式に入学している学生など、多様な学生が集まっている。また、一般入試に合格した学生も、あくまでも入試の合格点に達したと判定されているものであり、他分野の学力も含めて合格点に達しているとは言えない。今後も大学のレベル(価値)指標として偏差値を活用するのであれば、非常に根拠のないあいまいなものになってきていると考え。GPAについても、あくまでも指標を利用しての学生支援などにつなげていくべきである。

大学の専門学校化、就職のための大学など、大学での学びについて様々な考え方があがるが、今後の社会での多様な学びとは何か。我々も学生時代に大学で学ぶ意味を試行錯誤し懊悩する中、多様な人との出会いの経験が自分を成長させてくれるものであると実感して社会で生きている。大学で学ぶ中、学生が色々な気づきを得る事で世界の懸け橋となる人材を輩出するべく、我々自身も不断の努力と研鑽が必要である。そうする事で、我々も学生から多くの気づきをもらって成長していると実感し、そこで働く実感や喜びを感じるであろう。

今後の考察としては、本稿で述べた研究について引

き続き検証していくとともに、多角的な考察が求められ、大学での学びの精度を高めるべく考察していきたい。また、クラブ団体活動に加入している学生で、特に幹部クラスなど、リーダーとして活躍する学生のタイムマネジメントがどのように行われているかを調査していく事も行いたい。もちろん、学生の成長を促すための研究であり、視野狭窄に陥らないよう留意する。

謝辞

前回発表した拙稿に対し、様々なご意見、ご指摘等を頂戴した事は、本稿を執筆するにあたり筆者自身の励みにもなり研鑽にもつながった。また、今回も寄稿にあたり、関係者の皆様に対しては大変ご迷惑をおかけした。ここにお詫びと感謝の念を記す。

注

1) 「大手前大学平成27年度履修ガイド」より
認定科目および合否による成績評価がなされるもの、その他あらかじめ指定された科目は対象外とされる。

参考文献

- 吉川博行 (2014) GPA を活用した学修支援に関する考察, 大手前大学 CELL 教育論集第 5 号, 2014.
- 大学評価・学位授与機構 (2016) 3-1, http://www.niad.ac.jp/sub_hyouka/ninsyou/hyoukahou200703/daigaku/yougo_d200703.pdf (参照日 2016.2.1) .
- 半田智久 (2011) 『成績評価の厳正化と GPA 活用の深化』 I, II, 地域科学研究会, 2011.3.25.
- 経済同友会 (2015) 『これからの企業・社会が求める人材像と大学への期待』, 2015.4.2, http://www.doyukai.or.jp/policyproposals/articles/2015/pdf/150402a_02.pdf (参照日2015.11.9) .
- 厚生労働省 (2013) 『労働経済白書』, 「平成25年版 労働経済の分析」第3章, 142-143.
- 中央教育審議会 (2010) 学士課程教育の構築に向けて (審議のまとめ) , 15-17, 2010.3.25.
- 山田浩之 (2007a) 現代大学生の学習行動, 第1章 「学生の変貌」, 山田浩之・葛城浩一 (編), 広島大学高等教育研究開発センター (RIHE) , 2007.
- 山田浩之 (2007b) 現代大学生の学習行動, 第2章 「大学生の学習行動」, 山田浩之・葛城浩一 (編), 広島大学高等教育研究開発センター (RIHE) , 2007.
- 溝上慎一 (2009) 「大学生生活の過ごし方」から見た学生の学びと成長の検討, 京都大学高等教育研究第15号, 2009.

溝上慎一 (2015) 大学教育学会第37回大会, 「学修成果の可視化から見える学生像」, 大学教育学会, 長崎大学, 2015.6.6.

SUMMARY

Currently the university is working to improve students' academic motivation with a variety of educational methods. This report discusses the learning patterns of college students who belong to extracurricular activities in Otemae University. Although there is much focus on the GPA scale, there are in fact a variety of indexes to measure student growth. This article clarifies the way in which growth can be measured in university students and the impact of extracurricular activities on learning.

KEYWORDS: GPA, LEARNING SUPPORT, EXTRACURRICULAR ACTIVITIES, STUDENT TEMPERAMENT, LEARNING STATUS OF EACH ENTRANCE EXAM